新たに開く! 歌登酪農の地、私はその希望になる

北海道名寄産業高等学校 酪農科学科　3年　開地 希望

「長くて、あと二年やなぁ」

今年で66歳になる父が、そうぼやきました。

酪農を営む父は、去年10月、疲労によって怪我を負い、入院しました。完治までの間は、母とベトナムからの外国人研修生の二人で牧場を支えています。

私が生まれ育った北海道枝幸町は、第一次産業が盛んで、特に毛ガニ漁獲量が日本一と言われる町です。その中で、歌登地区は、森に囲まれ、北の理想郷・フォレストピアと呼ばれるほど恵み豊かな場所ですが、夏は30℃、冬は−30℃にも達する、厳しい自然環境の町でもあります。

かつての歌登は、町のカントリーサインに牛がイラストされていました。町内のお祭りの時には、牧草でできたロールの神輿が商店街を周るなど、酪農が盛んな町として、とても賑っていました。しかし、現在では人口2000人を切り、酪農家戸数も最盛期の200戸から40戸にまで減少しました。そして、離農する農家も後を絶ちません。

私の父は、37年前に、28歳で四代目となりました。最初は25頭の飼育から始め、今では経産牛60頭、育成牛30頭、年間乳量は約520トンで経営しています。これは、酪農が盛んな北海道の道北地域では中堅規模で営んでいるものです。

中学生までは、私も部活動と両立しながら家業を手伝っていました。しかし、現在通っている北海道名寄産業高等学校酪農科学科に進学してからは寮生活になり、両親だけで仕事をしている状況です。昨年から、ベトナム人の研修生を受け入れるようになり、高齢の両親も作業量を研修生に預け、できるだけ負担を軽減できるようにしています。

私は今、酪農科学科に通い、『畜産』『飼料作物』『農業機械』などの授業を受けています。ここでは、将来、自分が経営していくために欠かせない知識・技能を身に付けることができます。

ですが、学びを深めていくほど、今、両親の行っている経営状況には限界があるのではないかと考えるようになりました。

そこで私は、両親がいつもお世話になっている、宗谷南農業協同組合で営農担当をしている、奥平さんに相談をしました。酪農の経営について様々なお話を伺い、そこで聞いた『農業生産法人』について、とても興味を持ちました。そして、農業生産法人にすることによって、融資を受けやすくなる、農地の取得が容易になるなどの利点があることを聞き、私は大きな魅力を感じました。

私は、『農業生産法人』を立ち上げ、生まれ育った歌登地区の酪農衰退に歯止めをかける

役割を担いたい！と強い想いを抱くようになりました。そのためにどのようなことができるのか、どのような方策があるか、自分なりに考え、私は父に３つのことを提案してみました。

一つ目は、小規模から中規模の酪農家を集約し、大規模酪農へ事業転換を進めることです。実は、歌登地区では、我が家のような中規模以下で家族経営を行っている酪農家が大半です。なので、歌登地区全体で大規模酪農へ転換を目指すことはできないかと考えました。

枝幸町内では、酪農衰退の対策として、（株）アグリサポート枝幸が設立され、３月に「ファームAYNI（アイニ）」という５００頭規模の牛舎が新築されました。この牧場からも経営の合理化・スリム化をすることで、地域の労働力市場を活性化し、酪農の発展・体質強化が見込めると伺いました。また、増加傾向にある外国人研修生を効率的に派遣する仕組みを構築することができれば、私の両親のように、高齢の酪農家への負担を軽減することが可能ではないか考えています。

「ファームAYNI（アイニ）」の牛舎を手本に、新たなメガファームを建設することが私の夢の一つです。

二つ目に考えたのは、離農した農家の採草地を有効活用することです。私の家がそうであったので調べてみたところ、歌登地区の酪農家は、ほとんどが離農者から少なからず採草地を借りて牧草を収穫していることが分かりました。私の家も、全体の４０％、約８０ヘクタールの牧草地を離農者から借りていました。

酪農家にとって、初夏から行う牧草の収穫作業は、とても重要な作業です。しかし、日常の飼養管理に加え、天候を見計らって行うため、ものすごい負担となります。

私はこの繁忙期に肥料散布・牧草収穫・堆肥散布といった牧草収穫に関わる一連の作業を、一括で管理する部門を法人の中で立ち上げるのが良いのではないかと考えました。そして、飼料の安定供給をはかるため、歌登地区にTMRセンターを設立したいと考えています。これにより、酪農家は乳牛の飼養管理に集中することができ、作業の労働時間を短縮できると考えています。作業時間の短縮は、高齢化や従事者の減少が進む第一次産業ではとても大事であり、そのために歌登地区全体で連携し合うことが必要だと考えています。

三つ目は歌登生乳を加工乳としてブランド化することです。

生乳は飲料向けと加工向けで取引されますが、加工乳は飲料乳とくらべ３０円ほど安く取引されています。南宗谷地域が出荷している生乳のほとんどは、よつ葉乳業宗谷工場に運ばれ、全粉乳とゴーダチーズの製造に使われていると伺いました。私は当初、そのことで南宗谷地域の酪農家は、利益が少ないのではと不満を感じました。しかし、加工乳として安価に取引されても、国から補給金が支払われるしくみになっていることを、食品流通の授業で学びました。また、加工向けに生産されている生乳の９割が北海道産であることも

知りました。そのことを学び、地域の特色にあまり差が見られないのであれば、逆に加工乳としてブランド化を目指すのはどうかと考えました。

飲料乳では、よく生産地の地名を載せた牛乳を見かけることもあるので、私は『歌登生乳のゴーダチーズ』など、歌登が酪農に力を入れている町としてアピールすることで付加価値を高められないかと考えています。

私の構想を聞き、離農を考えていた父ですが、『やめられなくなっちまったなぁ』と少し笑顔でぼやいていました。

高校卒業後、私は大学に進学させてもらえることになりました。酪農に必要な技能をもっと習得する、牧場を経営していくためのノウハウを学ぶ、父に話した構想を実現するための人脈を築いておく。残された高校生活、大学進学後の時間で私が身に付けなければいけないものがたくさんあります。

先祖が開拓した、歌登酪農の衰退を止め、新しい時代に必要とされる酪農を切り開く、それが私の生涯をかけた使命だと考えています。

新たに開く！ 歌登酪農の地、私はその希望になります。